間伐物語 ―収入を得ながら、森を育てる方法―

岩手県立久慈農林高等学校　２年◯泉川努志 いずみかわつとし　梶谷博明 かじやひろあき
加美章人 かみあきひと　小向　進 こむかいすすむ
◯立成悟視 たつなりさとし　◯田中　忍 たなかしのぶ
中田　修 なかたおさむ　中田光信 なかたみつのぶ
◯中野芳美 なかのよしみ　谷地裕明 やちひろあき

１　はじめに

我が国の人工林面積は1,000万haをこえ、そのうち間伐期のⅤ～Ⅷ齢級は半数以上を占めている。しかし、間伐の実施率は約５０％といわれており、過密状態の人工林はますます増えつつある。このような、いわゆる「ひょろひょろ林」は生態系が極めて不安定であり、環境面でも経済面でも将来性が危ぶまれる。

間伐が進まない理由は、林道密度、作業者の高齢化、伐採技術の難しさ、間伐丸太の低価格などなど決して一つではないが間伐丸太が半分以上林内に放置されているという事実にとても驚いた。と同時に僕たちの好奇心がふくらみはじめた。

２　研究の始まり

１９９６年に先輩たちは集成材というものの学習に力を入れていた。岩手県九戸村の森林組合の集成材工場をたびたび訪れ、見学した。

１９９７年に先輩たちは久慈地方合同庁舎の林務部を訪れ久慈地方の林業や森林の概要を学習した。久慈地方がアカマツの名産地であることや間伐が急務であることなどを知った。そして、間伐材を集成材に加工し販売している工場があることを知り研修会を実施した。また、その集成材を購入し本棚などの家具を製作する実習もはじめた。

１９９８年には本校では隣接する同総会林にモデル林を設置し間伐の実践を開始した。自分たちで間伐材を生産し、工場に持ち込み、集成材に加工される様子を学習した。集成

材は再び学校に届けられ、これを材料に家具製作の実習がすすめられた。この取り組みはテレビ番組や間伐推進キャンペーンなどにも紹介され、好評であった。

１９９９年は間伐材を利用してさまざまな商品を作ってみた。先輩から引き継いだ「２１世紀の森を育てる本棚」をはじめ、木炭、シイタケ、マイタケ、カブトムシ、花壇の枠、などなど。こうした取り組みが雑誌やテレビ番組などに登場するようになり、ますますやる気が出てきた。

３　２０００年の活動計画

先輩たちの活動を引き継ぐことになった僕たちは、集成材や間伐の学習に力を入れています。秋田県大館市の樹海ドームを見学したり、今週の月曜日には岩手県種市町の国有林で大型高性能林業機械による伐採作業を見学したりしている。

また、間伐材の集成材を使った製品を久慈市の皆さんに実際に使ってもらい、流通や消費の学習もやっていきたいと考えている。